

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

### 負債の動態に関する比較民族誌的研究

2020 年度第 2 回研究会（通算第 3 回目）

日時：3 月 2 日（火）14:00–17:15, 3 月 3 日（水）13:00–16:00

場所：Zoom によるオンライン研究会

使用言語：日本語

共催：AA 研共同利用・共同研究課題「負債の動態に関する比較民族誌的研究」、  
科研費（基盤 B）「負債の動態をめぐる比較民族誌的研究：アジア・アフリカ・  
オセアニア農村社会を中心に」（研究代表者：佐久間寛（明治大学） 課題番号：  
19H01388）

3 月 2 日

14:00-15:30 生駒美樹（AA 研共同研究員）

「債務奴隷と賃労働：19 世紀東南アジア大陸部債務奴隷と現代ミャンマー  
のチャ摘み労働者の事例から」

15:45-17:15 中山智香子（東京外国語大学）

「支払手段としての貨幣の思想史的考察：G.F.クナップ『貨幣の国家理論』  
（1905）を手がかりに」

3 月 3 日

13:00-14:30

映像作品上映『ラ・デット／負債 — 地獄の連鎖を断ち切るために』

14:45-16:00 全員

総合討論&打ち合わせ

#### 概要

2020 年度第 1 回研究会を上記の日時およびスケジュールのもと実施した。緊急事態宣言下の状況に鑑み Zoom によるオンライン方式を採用し、また発表の辞退があったことにもとない当初の予定より時間を短縮しての開催となった。3 月 2 日に 16 名、3 日に 17 名が参加した。司会は両日とも佐久間が務めた。

本研究会では、負債という現象を焦点にしつつも労働、貨幣、経済危機といった多角的な主題をめぐる活発な議論が交わされた。また、オブザーバーとして参加した小林純立教大学名誉教授からは、西欧経済思想史の観点にもとづく貴重なコメントがえられた。とりわけ生駒発表にたいしてなされた、現代ミャンマ

一の労働慣行の特異性を照らし出すうえで西欧史学の地代理論が有効であるとの指摘は、非西欧地域の事例を文化人類学的な視点から考察することに終始しがちな大多数の研究会メンバーにとり大きな刺激となった。さらに今回の研究会では映像作品『ラ・デット』を共同鑑賞し、それについて議論するという試みがなされた。口頭発表にたいする質疑応答とはまた異なる充実した意見交換の機会となった。

各報告の概要は下記の通りである。

(佐久間)

「債務「奴隷」と賃金労働者: 19世紀東南アジア大陸部債務「奴隷」と現代ミャンマーのチャ摘み労働者の事例から」

生駒美樹 (AA 研ジュニアフェロー)

本発表では、デヴィッド・グレーバーの『負債論』(2016)で指摘されている、奴隷制と賃労働の間にみられる類似性について、19世紀のシャムとビルマの債務「奴隷」と、現代ミャンマーのチャ摘みをめぐる農家と労働者の事例から検討した。グレーバー(2016)は、主人と奴隷の関係、雇用者と被雇用者の関係は原理的に非人格的であり、奴隷を買うときも、労働者を雇用するときも、信用取引ではなく現金が用いられる指摘している。本報告では、債務により不自由労働に従事せざるを得ない「奴隷」と、農家から食品などを前借りしその返済のためにチャ摘みに従事する労働者の比較から、労働力が貨幣価値に換算されつつも信用取引が行われているケースについて検討した。

(生駒)

中山智香子「支払い手段としての貨幣の思想史的考察：G. F. Knapp 『貨幣の国家理論』(1905)を手がかりに」

中山智香子 (AA 研共同研究員, 東京外国語大学)

本報告はまず、1905年に”Die staatliche Theorie des Geldes” (『貨幣の国家理論』)を刊行したG.F.クナップの生涯と主要著作、同著作の構成を確認した上で、この著作の主要論点である表券主義と、そこから今日のMMT(現代貨幣理論)に至る系譜の概略を説明した。次にD.グレーバーが『負債論』でクナップから表券主義を継承した部分を確認し、ここで批判的に参照されたM.アグリエッタ&A.オルレアンらの貨幣主権論の概要を紹介しながら、貨幣と債務の概念的、歴史的関係と相違点、そこに関わる論点を考察した。

(中山)

映像作品上映『ラ・デット／負債 — 地獄の連鎖を断ち切るために』

「借金をする事」は現代に生きる人々にとって重要な生活手段となっている。家や車の購入も学費の支払いも、負債のシステムなしでは暮らしは成り立たない。国の場合でも、国債の発行は公共事業や社会保障を確保するのに欠かせない。

しかし、国や社会は負債に依存し過ぎではないだろうか？ 際限なく負債が積み上がり続けることに対し、私たちの感覚は麻痺してはいないだろうか？ 各国の国債の規模は膨らみ続け、2009年の金融危機がさらに拍車をかけた。その際、多くの大手銀行が国の支援によって救われたが、問題の核心は解決されなかった。2007年に発覚したギリシャ債務の虚偽報告をきっかけに、債務問題は「ユーロ危機」として欧州全体に波及した。そして、EU政治は混迷を極めた。

このドキュメンタリー映画は現代の社会経済にとって不可欠となった債務の問題をその根本から問い直す。デルサル監督は欧州を駆け巡り、さまざまな専門家にインタビューを試みた。人類学者のデヴィッド・グレーバー、仏国民議会議員のカリーヌ・ベルジェ、ロンドンの政治経済学者アン・ペティフォー、フランスの経済学者ベルナール・マリスとトマ・ピケティ。「貨幣の私有化」を強く批判するマリスは、2015年1月のシャルリー・エブド襲撃事件で命を落とした人物だ。

債務の問題は現代世界が直面している様々な現象 — 「ポピュリズム」の広がりや極右政党の台頭、富裕層と庶民の間で深刻化する経済格差 — とも無関係ではない。「経済学者のゲーム」のルールは、私たちが気付かないうちに日常生活の中に浸透した。私たちは、巨大な「経済マシーン」から果たして解放されるのだろうか？」

(作品紹介文より。)

<https://www.institutfrancais.jp/tokyo/agenda/cinema1706261900/>